

曹魏地方官攷

伊藤 敏雄

貴族制や曹魏政權の性格問題との關連から、曹魏時期の中央官僚とその任官者に對する言及は多く、研究も進んできている。一方、地方官に對しては、本籍地任用の問題や制度史的な面での言及に限られ、その實態や任官者に對する分析は未開拓のまま残されていると言える。そして、地方官任用の在り方は、曹魏政權の性格や貴族制の成立過程を考える上でも、無視できないと思われる。

そこで、本報告では、曹魏時期の州刺史・郡太守・縣令・典農官任官者を『三國志』『晉書』等より抽出した上で、地方官とその實態や、その任用の在り方を追究し、併せて曹魏政權の性格や貴族制との關連についても論及したい。曹操期・文帝期・明帝期・齊王芳期等に分けながら考察していきたいが、特に地方官任用（昇進・左遷を含む）に當って、中央官との關係を始め、何等かの原則や權力者等の政治的意圖が働いたかどうかという點に注目しながら考察したい。また、本籍地任用回避の原則と本籍地任用の問題についても、曹魏の地方官任用全體の中で再検討してみたい。

元明の文廟從祀議論について

小島 毅

明の嘉靖九年、禮制改革の一環として文廟の祭祀形態に變更が加えられた。報告者はかつてその經緯を述べた論文を發表し、この改制が嘉靖帝個人の立場や嗜好に由来するのではなく、朱子學の論理からして當然の歸結であったことを論じた（「嘉靖の禮制改革について」、東京大學東洋文化研究所編『アジアの社會と文化』Ⅱ所收、一九九二年）。しかし、ここでは嘉靖年間の議論のみを考察對象としており、それ以前の時期からの連續性には言及しなかった。本報告では、從祀される儒者の選擇についての議論をとおして、孔子像の變質を考察する。南宋淳祐元年から周程張朱が文廟に從祀されるようになったことは、朱子學の體制教學化を示す象徴的事件として言及されることが多い。その後も宋元の儒者があらたに從祀者の列に加わったが、一方ですでに從祀されている人物の排除や、それまで從祀の對象にならなかつた漢儒の追加が提案されている。その論理をおうことで、孔子の稱號が「文宣王」から「至聖先師」になる理由を解明していきたい。